

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史的変遷： -ung の機能領域はどう拡張したか

黒 田 享

1. はじめに：派生接辞の「生産性」

ドイツ語では品詞の変更を起こす派生が頻繁に見られ、初学者用の教科書でも言及されることがある。特に (1) に示す接尾辞 -ung を用いた、動詞の表す事象や状態を概念化して表す名詞の派生は広く知られている。

- (1) wiederholen > Wiederholung
erkranken > Erkrankungung
überprüfen > Überprüfungung

こうして作られた名詞は文法学では *nomen actionis* と呼ばれるが、日本語では定まった名称がないので、本稿では行為名詞¹と呼ぶ。接尾辞 -ung によって動詞から派生される名詞の全てが行為名詞になるわけではない。現代ドイツ語における名詞形成を包括的に捉えた Wellmann (1975: 94) は -ung による名詞形成に 7つの種類²を認めている。このうち 5種類が動詞を基体とするが、行為名詞は -ung¹を伴う名詞にあたる³。

¹ 本稿で行為名詞と呼ぶ名詞には、行為動詞を基体とするものに限られず、*Beeilung*, *Betrachtung*, *Erwägung* など心理活動や事象(持続的な場合もある)を表すものも含まれる。

² ここで示す各種類の日本語記述は本稿筆者による。-ung による名詞形成にはこの他、名詞を基体とし、特段の意味変化をもたらさない種類もある(*Forstung*, *Mauerung*, *Waldung*, *Wandung*)が、本稿では考察の対象とはしない。また、派生と捉えられないものも取り上げない(*Innung*, *Lichtung* など)。

³ 個々の名詞がどの種類に属するかは明確に捉えられない場合もあり、具体的に用いられる文脈ごとに判定する必要がある。

-ung¹: 行為それ自体の概念化

Abfertigung, Aussortierung, Einfrierung, Spiegelung

-ung²: 動詞が表す事象が引き起こす状態

Entzückung, Erbitterung, Erstarrung, Verblüffung

-ung³: 動詞が表す事象の影響を受けるもの (被動作主)

Abbildung, Dichtung, Erzählung, Abordnung

-ung⁴: 動詞が表す事象の手段となるもの

Ausrüstung, Auszeichnung, Bescheinigung, Füllung

-ung⁵: 動詞が表す事象を引き起こすもの (動作主)

Bedienung, Erscheinung, Erhebung, Regierung

-ung⁶: 基体名詞の総体

Bestuhlung, Bewölkung, Federung, Täfelung

-ung⁷: 動詞が表す事象が起こる場

Niederlassung, Wohnung

動詞から行為名詞を形成する手段は接尾辞 -ung に限らない。Wellmann (1975: 209-250) は行為名詞の派生に用いられる接尾辞として -ung の他に -Ø, -(a)tion, -(er)ei, Ge- -(e), -nis, -er, -erich, -e, -(s)t/d(e)/te, -en, -tum, -enz, -(a)tur, -ement, -age があると述べている。もっとも、このうち -Ø や -e による派生とされるのは名詞語幹形成として、-en による派生は動詞不定詞の名詞化として位置付けられる。また、-(a)tion、-(er)ei、-enz、-(a)tur、-ement、-age は外来要素である。ドイツ語の語形成体系において主要と思われる基体動詞と行為名詞の関係を (1) と同じように記すと次のようになる⁴。

⁴ verstehen > Verständnis のように名詞化の際に音声的变化を伴う場合もあるが、その条件についての議論は他の機会に譲る。

(2) versuchen	>	Versuch- <u>ø</u>
verbieten	>	Verbot- <u>ø</u>
plündern	>	Plünderei
rasen	>	Raserei
bedrängen	>	Bedrängnis
erlauben	>	Erlaubnis
seufzen	>	Seufzer
(sich) versprechen	>	Versprecher
schlenkern	>	Schlenkerich
reisen	>	Reise
folgen	>	Folge
fahren	>	Fahrt
jagen	>	Jagd
freuen	>	Freude
irren	>	Irrtum
wachsen	>	Wachstum

-ung には動詞から新たな語彙を生み出す能力が備わっているが、(2) において動詞と名詞を仲介する要素の中には Fahrt と fahren を結びつける -t のように新たな行為名詞を形成しない要素もある。これは語形成研究で言われる「生産性 (productivity)」⁵ の欠如を示し、動詞と名詞の関係は派生というより、意味的に結びつくが独立した二つの語の関係と考えるのが相応しい (つまり、両者の関係を「>」記号で記述することは適切ではない)。Fahrt は語源的には fahren からの派生語として成立したと言っても、現代ドイツ語では語彙化していると考えべきなのである。

⁵ もっとも生産性の程度は (そもそも文法外条件である) コミュニケーション上の新語形成の必要性や既存語彙による新語形成阻止 (blocking) 現象によっても左右される (Wilmanns 1899: 388, Paul 1920: 75, Fleischer/Barz 2012: 226 も参照) ため、語形成要素に備わる性質だけで測れるものではない (Dudengrammatik 2022: 629 参照)。

となると、現代ドイツ語の行為名詞形成体系を適切に捉えるためにはそれほどのように歴史的に発展してきたかを知っておくことが必要になる。そこで本稿では、いくつか行為名詞を形成する接尾辞を取り上げ、それらが歴史的にどのような相互関係にあり、どのように振る舞ってきたのかを確かめることとする。

2. 調査の対象となる語形成要素

Wellmann (1975) が挙げる動詞から名詞を派生する様々な要素は構造主義言語学では互いに範列的關係にあり、文法体系上同じ位置付けになる。しかし schlagen > Schlag, arbeiten > Arbeit, urteilen > Urteil といった関係を実現するとされる -Ø の接尾辞としての位置付けはやや難しい。Wellmann (1975) はこれを無音価、いわゆる「ゼロ要素」の接尾辞と位置付けていると解釈できるが、その機能を同定することには慎重さが求められる。-Ø によるものとされる語形成は語根に（音声・形態の実体性が乏しく、屈折と明確に峻別できない）語幹形成要素⁶が付与されることで実現する語幹形成⁷によるものとも言えるからだ。具体的な音価が伴ってはいらぬものの、-e や -ei についても同じことが言え、接辞の付与として位置付けられるか議論の余地がある。

とすると本稿で議論すべきドイツ語特有の要素として残るのは -ung の他 -nis、

⁶ 注意が必要なのは、語幹形成要素が「接尾辞」と呼ばれる場合もある (Bammesberger 1990: 30 など) ことである。本稿では語幹形成と区別できる機能を持つ要素を接尾辞と位置付けることにしたい。Bahder (1880: 4-5) は2種類の接尾辞を区別して呼び、語幹の派生を「一次 (primär)」、接尾辞による語の派生を「二次 (sekundär)」とする (Hirt 1932: 3, Meid 1969: 46 も同様)。Hirt (1932: 3) は二次接尾辞は語として成立した要素に付与されるものとして一次接尾辞と区別する。つまり -t は語として成立しない *Macht と結びついて Macht を形成するため、一次接尾辞であるが、語として成立する Freund に付与されて Freundschaft を形成する -schaft は二次接尾辞である。

⁷ 音価が伴わない要素による語の派生（こうした派生は語形成スキーマとして想定可能である）についてはその方向が問題になる。Wellmann (1975: 229) は動詞 schlagen と名詞 Schlag の関係について、schlagen が強変化動詞である（それゆえに古来から存在する語彙と位置付けられる）ことに鑑み、schlagen から Schlag が派生されたとしているが、動詞からの名詞派生を論じた Wellmann (1973: 68) では逆に名詞 Schlag から動詞 schlagen が派生されたと解釈している。過去に存在した語彙の全体が伝承されているわけではないという資料的な事実を考慮すると、この問題の完全な解明は求められないだろう。無音価の接尾辞を認めず、同形の語彙要素が複数の品詞を持っているとする立場については Motsch (2004: 17-18) を参照。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ungの機能領域はどうか 黒田 享

-er, -erich, -(s)t/d(e)/te, -tum ということになる。Wellmann (1975: 245) は調査したコーパスにおける行為名詞の頻度をまとめているが、-nis, -er, -(s)t/d(e)/te, -ung はどれも 0.5%以上の割合を占め、ドイツ語の語形成体系において一定の役割を果たすようだ。これらを Splett (1993: II 183-184) の古高ドイツ語接尾辞リストと照らし合わせてみよう。-nis は -nessi/-nessî, -nissi/-nissa/-nissî, -nussi/-nussa/-nussî にあたる。Wellmann (1975) が -(s)t/d(e)/te と一括して扱った要素はいくつかに分割しないと古高ドイツ語の対応要素が捉えられない。-(s)t が伴う名詞は Überkommst, Kunst のように -st で終わる場合と Einfahrt, Einsicht のように -t で終わる場合がある (Paul 1920: 76, Wellmann 1975: 236) が、-s- の出現は音声環境に依存するところが大きく、-st も -t も機能的には変わらないと考えて良い (Wilmanns 1899: 331)。Wellmann (1975) では区別されていないが、Ankunft などに含まれる -ft も同様に扱うべきだろう (Wilmanns 1899: 331)。-t は Splett (1993: II 183-184) の古高ドイツ語接尾辞リストには含まれていないが⁸、現代ドイツ語の語形成研究においては接尾辞として言及されることがあり (Fleischer/Barz 2012: 254)、行為名詞形成手段の一つとして位置付けたい。-d (e) は末尾母音 -e を伴う場合 (Täufde, Freude) と伴わない場合 (Jagd) がある。前者は古高ドイツ語の -ida/-idî にあたるものだが、後者は -ât/-âta にあたる。Splett (1993: II 185-385) のリストによると -ida/-idî で終わる語が 724 件あるのに対し、-ât/-âta で終わる語は 14 件しかなく⁹、接尾辞としてより重要な役割を果たすのは -ida/-idî ということになるだろう。-te で終わる名詞 (Freite, Blüte) は使われる単語が極めて少数で (Wellmann 1975: 236)、Wellmann も詳しく議論していない。-ung は古高ドイツ語の接尾辞 -ung/-unga にあたるものとして捉えられる。なお、Wellmann (1975) が現代ドイツ語の行為名詞形成要素の一つとして位置付ける -er は古高ドイツ語の -âri/-âra にあたるが、古高ドイツ語でこの

⁸ もっとも Splett (1993) の語構造分析では -t が接尾辞として位置付けられている。-t を語幹の一部とする考え方は Bahder (1880: 62ff.)、Kluge (1926: §127-129)、Meid (1969: 53)、Bammesberger (1990: 139ff.) に見られる。

⁹ Wellmann (1975: 236) でも -d 名詞として認められているのは 2 件に留まるが、-de 名詞は 11 件ある。

接尾辞により形成された名詞は動作主表現が基本で (jagâri ‚Jäger‘ < jagôn ‚jagen‘, predigâri ‚Prediger, Lehrer‘ < predigôn ‚predigen, lehren‘ など)、行為名詞形成要素として振る舞うことはないようだ¹⁰。

こうした背景から、本稿では現代ドイツ語の -nis, -t, -de, -ung を行為名詞形成のための主要な要素として認めることとする。以下では、これらに相当する古高ドイツ語・中高ドイツ語の要素の振る舞いを観察していくことにしよう。

3. 行為名詞の意味的・形態的特徴に関する先行研究

ドイツ語における -nis, -t, -de, -ung を用いて形成された行為名詞の存在、そしてそれらの振る舞いが現代に至るまで経た歴史的変化はドイツ語研究では早くから議論されている。ただし、初期の議論における注目の焦点は個々の要素の相互関係よりも、主として個別の音声的・形態的特徴の変化にあった。そうした記述からわかることをまとめてみたい¹¹。

-nis (Grimm 1826: 321ff., Wilmanns 1899: 355, Paul 1920: 70, Kluge 1926: 72, Klein/Solms/Wegera 2009: 105ff.) については、Wilmanns (1899: 360) が古高ドイツ語で主に形容詞基体の名詞派生に使われ、動詞からの派生は後から発達したとしている。動詞からの派生機能が後から発達したという記述は Paul (1920: 70) にもあるが、Henzen (1957: 177) は動詞基体の名詞形成はゴート語で目立ち、名詞基体が主流になったのは古高ドイツ語期でのこととする。Klein/Solms/Wegera (2009: 106) は中高ドイツ語の段階では 85% の -nisse 名詞が動詞を基体とすると述べている。

-t (Grimm 1826: 193ff., Wilmanns 1899: 330ff., Paul 1920: 76, Kluge 1926: 66, Henzen 1957: 183ff., Klein/Solms/Wegera 2009: 109ff.) は Grimm (1826: 211) に

¹⁰ 中高ドイツ語の語形成を網羅的に記述する Klein/Solms/Wegera (2009: 80ff.) も -er に相当する -er(e) に行為名詞形成接尾辞としての機能を認めていない。

¹¹ なお、本稿では簡略化のため現代ドイツ語の -nis, -t, -de, -ung にあたる要素を古高ドイツ語については Splett (1993) に沿って -nissi, -t, -ida, -ung、中高ドイツ語については Klein/Solms/Wegera (2009) に倣って -nisse, -t, -(e)de, -unge と記すこととする。全体について話題にするときはそれぞれの現代ドイツ語の形のみを用いる。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ungの機能領域はどうか 黒田 享
よれば印欧語に発する要素だが、Wilmanns (1899: 332) はゲルマン祖語期以降は生産性を持たないものと見なしている (Henzen 1957: 184, Klein/Solms/Wegera 2009: 120)。また、上述のように -ft や -st という形で現れることもある (Wilmanns 1899: 331, Paul 1920: 76, Klein/Solms/Wegera 2009: 119)。

-de (Grimm 1826: 241ff., Wilmanns 1899: 339ff., Paul 1920: 57, Kluge 1926: 65, Henzen 1957: 174, Klein/Solms/Wegera 2009: 72ff.) はもともと形容詞基体の場合が主体とされるが (Wilmanns 1899: 340, Henzen 1957: 174)、古高ドイツ語期以降は動詞基体の場合が増えていく (Grimm 1826: 245, Wilmanns 1899: 342, Henzen 1957: 174, Klein/Solms/Wegera 2009: 73)。もともとの形態である -ida は中高ドイツ語期までに -(e)de へと弱化し、同時にタイプ頻度も低下する (Klein/Solms/Wegera 2009: 76)。

行為名詞形成において最も主要な要素は -ung (Grimm 1826: 359ff., Wilmanns 1899: 374, Paul 1920: 73ff., Kluge 1926: 82ff., Henzen 1957: 179ff., Klein/Solms/Wegera 2009: 132ff.) であるが、この機能はゲルマン祖語から観察される (Wilmanns 1899: 375)。基体は当初から動詞が主体であったという記述 (Wilmanns 1899: 374) ともともとは名詞基体の接尾辞であったとする記述 (Paul 1920: 73) の両方がある。

-nis, -t, -de, -ung を含む行為名詞の違いについてはあまり記述がない。Grimm が -ung を伴う行為名詞は「行為」と「状態」の両方を表すが (Grimm 1826: 360)、-t は意味機能が感知できないとしている (Grimm 1826: 210) 程度である。ただし、結びつく動詞の形態的特徴については一定の議論がある。特に -ung については詳細で、Wilmanns (1899: 375-377) は古高ドイツ語の -ung 名詞の基体に第2類弱変化動詞が多く、強変化動詞が少ないこと、接頭辞を伴う動詞が多いことを述べている (Kluge 1926: 82, Henzen 1957: 180, Klein/Solms/Wegera 2009: 132 も同様)。この他、-ung 名詞が他動詞を基体とする場合が多いこと (Paul 1920: 74, Henzen 1957: 181)、中高ドイツ語・初期新高ドイツ語において -ung 名詞の基体となる動詞には意味上の制限が見られないことも観察されている (Demske 2000: 375)。-ung 以外の要素については、-t が強変化動詞 (Paul 1920:

76, Henzen 1957: 183)、-de が第1類弱変化動詞と結びつきやすいこと (Kluge 1926: 65) が触れられている程度である。

現代ドイツ語の語形成に関する議論でも行為名詞の基体の特徴は話題になることがある。Paul (1920: 74-75) は現代ドイツ語において接頭辞を伴う動詞から派生された行為名詞が -ung を伴うことが多く、接頭辞を伴わない動詞 (特にいわゆる「非分離動詞」) が語幹形成によって名詞化される傾向があると指摘しているが、Fleischer/Barz (2012: 225-226) も -ung 名詞の基体が接頭辞を伴う動詞であることが多いこと、そして持続的 (durativ) 事態を表す動詞は基体となりにくいことを認めている。接頭辞動詞との親和性については -nis についても指摘がある (Fleischer/Barz 2012: 218ff.)。もっとも、行為動詞の形成可能性 (生産性) は -t, -de (Fleischer/Barz 2012: 254-255) について否定されている。

20世紀後半になるとコーパス調査に基づいて現代ドイツ語の名詞形成要素を体系化しようとする Wellmann (1975) の研究が現れ、統語的・意味的機能 (「機能領域 (Funktionsbereich)」) ごとに派生要素が比較されるが、古高ドイツ語に関しても Dittmer (1987) が -nissi, -ida, -ung を比較した上で、-nissi と -ida を伴う名詞の基体動詞には強変化動詞と第1類弱変化動詞、そして複合動詞が、-ung を伴う名詞の基体動詞には第2類弱変化動詞、そして接頭辞を伴わない動詞が多いこと (Dittmer 1987: 300)、-ida が単音節動詞と結びつきやすく、-nissi と -ung が複数音節動詞と結びつく場合が多いことを述べている (Dittmer 1987: 302)。

Dittmer (1987) が古高ドイツ語における -ung と接頭辞を伴わない動詞の親和性を指摘していることには注目する必要がある。これは Gutmacher (1914: 57) や Lindqvist (1936: 47) の指摘¹² と合致するが、上で見た Wilmanns (1899: 375-377), Kluge (1926: 82), Henzen (1957: 180), Paul (1920: 74-75) が主張し、Demske (2000: 389) が引き継いだ主張¹³ とは食い違うからである。この点につ

¹² Lindqvist (1936: 47) は -ida と複合動詞、-nissi と末尾が歯音になる基体の間に親和性があることを指摘している。

¹³ Demske (2000) は Baayen (1992) の分析手法を用いて接辞の生産性を計算により捉えようとするもので、Schneider-Wiejowski (2011) や Hartmann (2016) などの近年の語形成研究に通じるものである。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどう拡張したか 黒田 享
いては後で再度議論したい。

このような形態的特徴に基づいた行為名詞形成要素の研究に批判的な声もある。Pimenova (1996: 106, 2002a: 97-98) は行為名詞派生要素の相互関係を意味機能の点からも捉えようとし (Pimenova 1996, Pimenova 2002)、古高ドイツ語の -ung 名詞は動的な (aktiv) 事態を表す行為名詞、-ida 名詞と -nessi 名詞は非動的な (inaktiv) 事態や状態を表す行為名詞であると主張する (Pimenova 1996: 106-108, Pimenova 2002: 99, 102, Pimenova 2002a: 350)。だが、Pimenova の議論ではその中核となる「動的・非動的」という意味機能の差異が明確に示されない。ネイティブスピーカーが存在せず、伝承されているテキストの数も極めて限られる古高ドイツ語は言語表現の意味を捉えることが非常に困難であるので、繊細な意味機能について議論をすることはそもそも困難だが、Pimenova の分析も、個々の行為名詞が含まれる用例の独自解釈に依拠し、客観性を確保しにくいことは否めない。本稿においても、形態的特徴の変化を中心的に議論することにする。

4. 調査基盤 (コーパス) : 対訳による修道院戒律

ドイツ語の接尾辞 -nis, -t, -de, -ung の歴史的变化を明らかにするためには過去のドイツ語のあり方を観察することが避けて通れず、コーパス調査以外に有効な方法がない。また、古高ドイツ語期から現代に至る長期間の変化を視野に入れなければ従来の研究に有意義な形で関連づけた議論ができないだろう。そのため、テキストが確認できる最古のドイツ語の歴史的段階である古高ドイツ語、そして、それに続く中高ドイツ語期の状況を観察する。

今回調査するコーパスに選んだのは、「ベネディクトゥス戒律」として知られる修道院規則の古高ドイツ語訳と中高ドイツ語訳である¹⁴。修道院規則はそのテキストの性質から、記される内容の幅がかなり限定される。また、特定のテーマについての文が反復される構造を持つため、文体が単調にならざるを得ない。そ

¹⁴ なお、ベネディクトゥス戒律は序文 (Prologos) から始まるが、この部分を含まないテキストもあるので、調査対象からは除外する。

れでも、古高ドイツ語・中高ドイツ語の両方において同じ内容のテキストを使うことで異なる段階のドイツ語の共通点や差異、そして歴史的变化が観察しやすくなるはずだ。

コーパス調査はインターネット上で提供されている大規模電子コーパスを用いる。古高ドイツ語の用例抽出作業には Referenzkorpus Altdeutsch を用いた。ここでは 800 年前後の写本 (Masser 2002: 21) を底本とした Daab 版 (1959) に基づく古高ドイツ語訳ベネディクトゥス戒律のテキストを電子コーパスとして利用できる。中高ドイツ語については Referenzkorpus Mittelhochdeutsch を使用する。ここには Selmer 版 (1933)¹⁵ を底本とした 4 件の中高ドイツ語訳ベネディクトゥス戒律のテキスト、アドモント写本 (13 世紀、バイエルン・オーストリア語)、ツヴィーファルテン写本 (13 世紀第 1 四半世紀、東アレマン語)、ホーエンフルト写本 (1250 年前後、中ドイツ語・上ドイツ語)、オックスフォード写本 (14 世紀第 1 四半世紀、北ラインフランク・ヘッセン語) が収められている。中高ドイツ語の 4 つの写本のうち、ホーエンフルト写本とアドモント写本については戒律の一部しか電子化されておらず、データの規模に限られる。そこで、古高ドイツ語訳ベネディクトゥス戒律と比較調査するのは中高ドイツ語訳ベネディクトゥス戒律のうちツヴィーファルテン写本 (M358)、そしてオックスフォード写本 (M324) とする。この 2 つの中高ドイツ語訳戒律もテキストの一部に欠落があるが、古高ドイツ語訳戒律と比較するために十分なデータが得られるだろう。9 世紀初頭、13 世紀始め、14 世紀始めの 3 つのテキストを比較することになる。

Referenzkorpus Altdeutsch, Referenzkorpus Mittelhochdeutsch のどちらも文法情報のタグが付された言語データから構成されているが、語構造についての情報は含まれない。そこで、品詞情報が普通名詞になっている語データ (part of speech) をまず選び出し、その上で -nis, -t, -de, -ung を伴う行為名詞と解釈できるものを手作業で抽出する方法を採る。語構造の判定の際、古高ドイツ語につい

¹⁵ もっとも、Referenzkorpus Mittelhochdeutsch ではオックスフォード写本について底本の明確な言及がない。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどう拡張したか 黒田 享
 では Splett (1993) の記述を参考とした。

5. 古高ドイツ語における行為名詞形成接尾辞の分布

5.1 古高ドイツ語における各接尾辞の分布

まず、古高ドイツ語コーパスにおける行為名詞を形成する接尾辞の分布を観察しよう。古高ドイツ語コーパスでは、接尾辞 -nissi, -t, -ida, -ung を伴う様々な名詞が認められる。

- | | | | |
|------|--|---|---|
| (7) | stung <u>nissi</u> ‚Zerknirschung‘ | < | stungen ‚reuig machen‘ |
| (8) | durft _t ‚Bedürfnis‘ | < | durfan ‚bedürfen‘ |
| | tât _t ‚Tat, Handlung‘ | < | tuon ‚tun, machen‘ |
| | bijih _t ‚Gelöbniſ, Versprechen‘ | < | bijehan ‚bekennen, berichten‘ |
| | furiburt _t ‚Verzicht; Mäßigung‘ | < | furiberan ‚beherrschen, (sich) enthalten‘ |
| (9) | antfrâh <u>ida</u> ‚Befragung‘ | < | intfrâhên ‚fragen‘ |
| | gihalt <u>ida</u> ‚Bewachung‘ | < | gihaltan ‚bewachen‘ |
| | gisuohh <u>ida</u> ‚Untersuchung‘ | < | gisuohhen ‚suchen, erforschen‘ |
| (10) | îl <u>unga</u> ‚Eile; Eifer‘ | < | îlen ‚eilen, (sich) beeilen‘ |
| | aht <u>unga</u> ‚Verfolgung‘ | < | âhten / âhtôn ‚verfolgen‘ |
| | scouw <u>unga</u> ‚Anblick, Betrachtung‘ | < | scouwôn ‚(an)sehen, betrachten‘ |

「行為名詞」として認めるのは、gihaltida ‚Bewachung‘ や gisuohhida ‚Untersuchung‘ のような基体動詞の表す動作・事象を表すものが基本になる。これに基体動詞の表す（心理）状態を表す durft_t ‚Bedürfnis‘ や furiburt_t ‚Verzicht; Mäßigung‘, scouwunga ‚Anblick, Betrachtung‘ が加わる。注意しなければならないのは、接尾辞 -nissi, -t, -ida, -ung を伴い、基体として解釈できる動詞がある名詞であっても、動詞の表す動作や事象、状態を表さないものがあるということである。こうしたものには (11) のように比較的具体的な内容を表すものもあり、

行為名詞でないものとして分析対象外とすることが比較的容易だが、伝達行為を表すことが可能な動詞が基体となる場合 (gihengida ,Erlaubnis, Zustimmung' < gihengen ,erlauben, zulassen', girâtida ,Rat' < girâtan ,(be)raten; Rat geben', rafsunga ,Tadel' < refsen ,tadeln, zurechtweisen', zuomanunga ,Mahnen, Ermahnung' < zuomanôn ,ermahnen' など)、形成された名詞が伝達行為自体を表すのか、あるいは伝達内容を表すのか明確でない場合が多い。個々の名詞の意味機能は原典のラテン語、そしてそれが用いられている文脈を参考に解釈するが、解釈が困難な場合もある。

- (11) guotkundida ,Evangelium'
 giscrift ,Schrift(werk), Aufzeichnung'
 rehtunga ,Gerechtigkeit;(Ordens)regel'
 samanunga ,(Ver)sammlung;(Kloster)gemeinschaft'

古高ドイツ語コーパスで確認できた、-nissi, -t, -ida, -ung により形成された行為名詞と判定できる名詞の数は表1のようにまとめられる。接頭辞の有無により分けた場合のタイプ数も挙げる¹⁶。

表1 古高ドイツ語行為名詞の分布

接尾辞	タイプ数	トークン数	基体動詞が接頭辞を伴わないもの (タイプ数)	基体動詞が接頭辞を伴うもの (タイプ数)
-nissi	1	1	1	0
-t	20	59	8	12
-ida	21	47	4	17
-ung	16	24	13	3

¹⁶ tât ,Tat, Handlung' は原典の actus ,Treiben' や factum ,Tat, Handlung' などの翻訳に使われているが、ginuhtsama tât という組み合わせの場合は satisfactio ,Befriedigung, Entschuldigung' の翻訳に使われる。ここではこの表現が語彙化していると考え、計数上区別して考えるものとする。なお、eidswart ,Eidschwur; Verschwörung' や nôtduft ,Bedürfnis, Notwendigkeit' のような接頭辞を含まない複合語は接頭辞を伴わないグループに算入した。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどう拡張したか 黒田 享

コーパスで確認できた名詞のうち、-nissi を用いた形成名詞は1タイプ・1トークン (stungnissi ‚Zerknirschung‘) しか確認できないので、検討対象は -t, -ida, -ung を伴う行為名詞に限るべきだろう。しかし、-t 名詞を -ida 名詞・-ung 名詞と同列に並べて比較することにも問題がある。-t 名詞はトークン数に比べてタイプ数が限られているからだ。-ida 名詞の1タイプあたりのトークン数 (いわゆる「タイプ・トークン比」) は2.23、-ung 名詞の場合は1.5 だが、-t 名詞の場合は2.95 である。そもそも調査した古高ドイツ語コーパスの規模が小さいため (16,965 トークン)、ここから算出できる「タイプ・トークン比」の妥当性は高くないが、-t 行為名詞には (8) で挙げた *durft* ‚Bedürfnis‘, *furiburt* ‚Verzicht; Mäßigung‘ など、活動的行為というより状態に近い内容を表すものが多く、基体も強変化動詞に偏る。そのため、-t は -ida や -ung とは区別するべきだろう。上述したように、-t は現代ドイツ語では行為名詞形成手段としてすでに生産性を失っているが、これは古高ドイツ語期にすでに一定程度進んでいたのかもしれない。-ida 名詞と -ung 名詞はどちらもタイプ頻度・トークン頻度の両方で古高ドイツ語コーパスで確認できる行為名詞のかなりの部分を占める。両者の違いは結びつく動詞の形態的性質にあり、-ida 名詞の多くが接頭辞を伴うのに対し、-ung 名詞には接頭辞を伴うものが少ないことがわかる。このことは上述の Gutmacher (1914)、Lindqvist (1936)、Dittmer (1987) の観察と合致する。

5.2 古高ドイツ語の語形成は「隷属的」なのか

今回使用するコーパスはラテン語をドイツ語に翻訳したテキストだが、翻訳テキストの分析においては原典言語の構造の影響が問題になる。

今回使用した古高ドイツ語コーパスで -ung 名詞が対応する原典のラテン語文を確認すると、かなりの部分が派生語であるとわかる。これはベネディクトゥス戒律に限らず見られることで、Lindqvist (1936: 50, 65, 128) は Tatian や Notker の翻訳で -ung 名詞がラテン語原典の -tio 名詞¹⁷ の翻訳に多く使われることからこ

¹⁷ -tio は -ida や -ung 同様の語形成機能を持ち、行為名詞形成に用いられる。

これらのテキストでは隷属的 (sklavisch) 翻訳がされているとしている。もっとも、対応する原典テキストの語が -tio 名詞であることが多いという指摘はあくまで -ung 名詞 (そして -nissi 名詞) についてのことで、-ida 名詞についてはそうした観察がされていない。

そこで古高ドイツ語コーパスにおいて -ida 名詞・-ung 名詞がそれぞれどのようなラテン語の表現に対応するかを確認してみよう (Stotz 2000、Fruyt 2011 を参考にした)。ラテン語の動詞から行為名詞を形成する主要な手段としては -tio の他、生産性が低いと思われる -tus が挙げられる。また、現れる頻度はより低い。この他にも -entia, -ium, -mentum, -tas, -tia, -tus, -ia も加えることができる。派生語でない名詞や形容詞による場合も含めて -ida 名詞・-ung 名詞とのラテン語名詞の翻訳対応関係を示すのが表2である。

表2 -ida/-ung 行為名詞が対応するラテン語名詞の接尾辞別分布
(タイプ数/トークン数)

	総計	-tio	-entia	-ium	-mentum	-tas	-tia	-tus	-ia (deS/deA)	非派生名詞	形容詞
-ida 行為 名詞 対応	28/47	14/24	1/1	1/1		3/7	1/1	2/3	2/4	3/5	1/1
-ung 行為 名詞 対応	17/24	13/18	2/2		1/1					1/3	

この表からは、-ida 名詞・-unga 名詞ともに対応するラテン語名詞の最大のグループを構成するのは -tio 名詞であるとわかる。ただし、-unga 名詞の約4分の3が -tio 名詞の翻訳に使われる (タイプ数76.5%、トークン数75.0%) のに対し、-ida 名詞に対応する -tio 名詞は半分程度である (タイプ数50.0%、トークン数51.1%)。古高ドイツ語ベネディクトゥス戒律の著者 (翻訳者) にとって、-unga 名詞はラテン語の -tio 名詞に相当する標準的な語であったかもしれないが、-ida 名詞については -tio 名詞が対応語として標準化されていたとは考えにくい。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどうか 黒田 享

逆に、原典テキストの -tio 名詞の翻訳にはどのような表現が使われているだろうか。ベネディクトゥス戒律のラテン語原典テキストの姿は一定ではなく、文書ごとの差異がある。今回の調査対象である Daab 版古高ドイツ語ベネディクトゥス戒律に添えられたテキストに基づいて調べると、全体で 295 件の -tio (-io, -sio も含む) 名詞が確認できるが、そのうちほぼ半数 (151 箇所) は古高ドイツ語の対応語がない。ほとんどは古高ドイツ語写本のダメージに起因するテキストの欠落によるが、古高ドイツ語テキストに -tio 名詞にあたる表現が確認できない (つまり翻訳されていない) 場合もある。

原典テキストの -tio を伴う行為名詞に対応する翻訳は必ずしも行為名詞とは限らず、動詞定形 (12) や不定詞 (13)、接尾辞を伴わない名詞 (14) で訳されている場合もある。ただし、こうしたパターンはタイプ・トークン共に限定される。

(12) ... et iterum, quando occupationem minorem habent, exeant ubi eis imperatur in opera (第 53 章 18 条)

... pifahit minniron ... si kipotan ...

... sobald sie weniger zu tun haben, sollen sie zur Arbeit hinausgehen, wohin man ihnen befiehlt.'

(13) Et ideo brevis debet esse et pura oratio, nisi forte ex affectu inspirationis divinae gratiae protendatur. (第 20 章 4 条)

... scammas ... luttras ... fona minnu des anaplasannes dera cotchundiun ensti fora si kidenit,

.'Deshalb soll das Gebet kurz und schlicht sein, nur im Zustand der Erleuchtung durch die Gnade Gottes mag es länger dauern.'

(14) ... securi iam sine consolatione alterius, sola manu vel brachio contra vitia carnis vel cogitationum, Deo auxiliante, pugnare sufficiunt. (第 1 章 5 条)

... sihhure giu ano helfa andres einera henti edo arame uuidar achusti des fleiskes edo kidancha cote helfantemu kenuhtsamont fehtan.

... mit Gottes Hilfe sind sie jetzt imstande, furchtlos und ohne Beistand

anderer allein und aus eigener Kraft gegen die Laster des Fleisches und der Gedanken anzukämpfen.'

さらに、接尾辞 -tio を伴う名詞でも、行為名詞としては認められない場合 (congregatio ‚Gemeinschaft‘, elatio ‚Stolz‘, iussio ‚Befehl, Anordnung‘ など) は除外する必要がある。その上で原典テキストに基づいて -tio 名詞の翻訳に使われる古高ドイツ語の表現を確かめると、表3のようになる。-ida 名詞と -ung 名詞は確かに -tio 名詞の翻訳手段として一定の比率を占めるが、名詞語幹形成によって動詞から形成されたと解釈できる¹⁸ 名詞もそれに匹敵して多いことがわかる。

表3 古高ドイツ語における -tio 名詞の翻訳形式 (欠落部は除く)

		タイプ数	トークン数	トークン比率
名詞	-nissi (動詞基体)	1	1	0.7%
	-nisse (形容詞基体)	3	4	2.8%
	-t (動詞基体)	5	16	11.0%
	-ida (動詞基体)	10	24	16.6%
	-ida (形容詞基体)	2	2	1.4%
	-ung (動詞基体)	12	18	12.4%
	その他接尾辞 (動詞基体)	4	7	4.8%
	名詞化不定詞	3	3	2.1%
	語幹形成 (動詞基体)	11	25	17.2%
	非派生名詞	7	28	19.3%
	名詞基体 (接尾辞)	1	1	0.7%
	名詞基体 (語幹形成)	1	1	0.7%
	形容詞基体 (接尾辞)	2	2	1.4%
	形容詞基体 (語幹形成)	10	12	8.3%
動詞	動詞定形	1	1	0.7%

古高ドイツ語ベネディクトゥス戒律の翻訳者に -tio を伴うラテン語の行為名詞

¹⁸ 形容詞基体とする名詞の基体は分詞の場合もある。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどう拡張したか 黒田 享

を「隷属的」にドイツ語の派生語で置き換える習慣があったとは考えにくい。-tio 名詞と -ung 名詞の間には一定の対応的傾向はあるかもしれないが、それは派生語に派生語をあてる外形的な語構造に対するこだわりからではなかっただろう。Wilmanns (1899: 374) の言うように -ung がもともと動詞を基体とする名詞形成のための要素であったとするならば、最初から行為名詞形成との親和性が高かったのかもしれない。

6. 中高ドイツ語における行為名詞形成接尾辞の分布

6.1 中高ドイツ語における各接尾辞の分布

ここで Wellmann (1975) に基づいて現代ドイツ語における -nis, -t, -de, -ung により形成された行為名詞がどのように分布するかを確認しよう。Wellmann (1975: 211-242, 245) はトークン頻度については触れていないので、まとめられるのはタイプ頻度のみである¹⁹。

表4 現代ドイツ語における派生行為名詞

接尾辞	タイプ数
-nis	27
-t	13
-de	3
-ung	2086

この表にあるのはあくまで -nis, -t, -de, -ung を伴う行為名詞の総数だが、-ung を含む名詞の頻度が圧倒的であることがわかる。上述のように -de 名詞の頻度は古高ドイツ語以降減少すると言われるが (Grimm 1826: 245, Wilmanns 1899: 342)、古高ドイツ語コーパスにおいて -ida を伴う行為名詞が -ung を伴うものに劣らない頻度で現れていたことを考えると、古高ドイツ語から現代ドイツ語にか

¹⁹ Wellmann (1975) では Adelung の辞書に基づいて 18 世紀の語彙についても言及しているが、本稿ではあくまで現代ドイツ語コーパスの分布についての記述のみ参考にする。

けて明確な変化が起こったことは確実である。そこで以下では、この変化をより明確に捉えるため、中間段階とも言える中高ドイツ語における行為名詞の分布を観察する。

まず、中高ドイツ語コーパスから抽出できる *-nisse*, *-t*, *-(e)de*, *-unge* を伴う行為名詞の例をいくつか挙げておこう。M358 コーパスには、*-nisse* と *-(e)de* が融合した *-nissede* を使った行為名詞も見られるが、1 タイプ (2 トークン) に限られる。

- | | | | |
|------|--|---|---|
| (15) | <i>gehanc<u>n</u>üsse</i> ‚Zustimmung‘ | < | <i>gehen</i> ‚gestatten‘ |
| | <i>verlo<u>r</u>nisse</i> ‚Verlust‘ | < | <i>verliesen</i> ‚verlieren‘ |
| (16) | <i>du<u>r</u>ft</i> ‚Bedürfnis‘ | < | <i>du<u>r</u>fen</i> ‚brauchen, bedürfen‘ |
| | <i>t<u>a</u>t</i> ‚Tat, Werk‘ | < | <i>tu<u>o</u>n</i> ‚tun, machen‘ |
| (17) | <i>gel<u>ü</u>bede</i> ‚Gelöbnis, Versprechen‘ | < | <i>gel<u>ü</u>ben</i> ‚versprechen‘ |
| | <i>scham<u>e</u>de</i> ‚Schmach, Schande‘ | < | <i>scham<u>e</u>n</i> ‚sich schämen‘ |
| (18) | <i>bezz<u>e</u>ru<u>n</u>ge</i> ‚Besserung‘ | < | <i>bezz<u>e</u>rn</i> ‚bessern, verbessern‘ |
| | <i>ger<u>u</u>nge</i> ‚Begehren, Verlangen‘ | < | <i>ger<u>u</u>n</i> ‚begehren, verlangen‘ |
| (19) | <i>behal<u>t</u>nussede</i> ‚Einhaltung‘ | < | <i>behal<u>t</u>en</i> ‚bewahren‘ |

古高ドイツ語コーパスの場合と同じように、行為名詞は一つ一つの用例を文脈に基づいて判定した。*verwurfnisse* ‚Auswurf‘, *höchvart* ‚Hochsinn, edler Stolz‘, *schrift* ‚Geschriebenes, Schrift‘, *samenunge* ‚Vereinigung, Zusammenkunft‘, *zerstözunge* ‚Reue‘ のような動詞が表す動作や (心理) 状態を表さない名詞、基体として解釈できる動詞との意味的関連が薄い名詞は形式的に行為名詞と同じ性質を持っていても行為名詞としては扱わない。

二つの中高ドイツ語コーパスで確認できる *-nisse*, *-t*, *-(e)de*, *-unge* を伴う行為名詞の頻度は表 5 のとおりである。古高ドイツ語の場合と同様、接頭辞の有無により区別したタイプ数も挙げる。中高ドイツ語コーパスで確認できる場合の多くは対応する名詞が古高ドイツ語コーパスにもある (*durft* - *durft* ‚Bedürfnis‘,

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域は如何に拡張したか 黒田 享
 ilunga – ilunge ‚Eile‘, manunga – manunge ‚Ermahnung‘, tât – tât ‚Tat‘ など)が、
 中高ドイツ語コーパスでしか見られない名詞もある。また、調査対象とした2つ
 の中高ドイツ語コーパスで最も比率が高いのは現代ドイツ語と同様、-unge である。

表 5 中高ドイツ語行為名詞の分布

	接尾辞	タイプ数	トークン数	基体動詞が接頭辞を伴わないもの (タイプ数)	基体動詞が接頭辞を伴うもの (タイプ数)
M358	-nisse	1	1	0	1
	-t	8	10	4	4
	-(e)de	6	13	1	5
	-unge	43	87	25	18
	-nissede	1	2	0	1
M324	-nisse	5	7	0	5
	-t	6	13	4	2
	-(e)de	4	5	2	2
	-unge	28	52	14	14

中高ドイツ語コーパスに現れる -t 名詞の基体は古高ドイツ語コーパスの状況と同じように知覚動詞 (心理状態に近い) や強変化動詞に偏っている (anesiht ‚Sehen‘ < ane sehen ‚ansehen‘, tât ‚Tat, Werk‘ < tuon ‚tun, machen‘, verlust ‚Verderben‘ < verliesen ‚verlieren‘, vernunst ‚Einsicht‘ < vernemen ‚vernehmen‘)。古高ドイツ語について述べた、-t の接尾辞としての生産性が失われて -t 名詞が語彙化しているという解釈がここにもあてはまるだろう。

この節の冒頭で述べたとおり、中高ドイツ語コーパスでの行為名詞形成要素の分布を古高ドイツ語コーパスにおけるそれと比較すると、-ida を引き継ぐ -(e)de を伴う行為名詞の大幅な衰退が特に目を引く。現代ドイツ語の接尾辞 -de は生産性を失っているとされ、-de 名詞の数も限られているが、その状態は中高ドイツ語の段階ですであつたのかもしれない。

6.2 原典テキスト -tio 名詞に基づく変遷の追跡

Lindqvistによると(1936: 48-49, 129-130)、Tatian や Isidor では行為名詞として -nissi を伴う名詞がかなり見られるが、これは中高ドイツ語には引き継がれなかったようであるし、現代ドイツ語の状況とも食い違う²⁰。ドイツ語では -nis が行為名詞形成要素として確立することはなかったと言える。

前節の表5から読み取れるように中高ドイツ語コーパスでは -unge 名詞が接頭辞を伴う動詞を基体とする場合がかなりあり、古高ドイツ語コーパスで見られた基体動詞の形態上の制限はかなり希薄化していたと言える。変化の厳密な時期を突き止めるためには改めてより厳密な検討が必要だが、古高ドイツ語から中高ドイツ語にかけて -ida の衰退と -ung の適用範囲拡張が起こっていることは疑いない。

これを踏まえ、原典テキストの翻訳関係を基に古高ドイツ語コーパスと中高ドイツ語コーパスを横断的に観察することで -ida と -ung の関係を捉えてみよう。これは対照言語学研究における翻訳テキストと原典テキストをコーパスとした言語比較に準じた方法で、原典テキストの同一箇所の高ドイツ語訳と中高ドイツ語訳を対照すれば古高ドイツ語と中高ドイツ語の間で発生した機能変化がより明確に捉えられると期待できる。すでに言及したラテン語の主要な行為名詞形成手段である -tio によって形成された行為名詞がドイツ語の3つのコーパスでどのように翻訳されているかを捉え、-ida/-(e)de と -ung/-unge を伴う行為名詞の関係を明らかにする。

古高ドイツ語の場合と同じように、原典テキストにある -tio 行為名詞の全てに対応する中高ドイツ語の行為名詞があるわけではない。原典テキストにある -tio を伴う行為名詞の翻訳には動詞定形(20)、動詞の不定詞形(21)、名詞化された形容詞(22)など、様々な語形が使われる。そもそもドイツ語翻訳テキストはどれも不完全で、ラテン語原典と古高ドイツ語訳、二つの中高ドイツ語訳から成る

²⁰ もちろん、Pimenova (1996: 110-111; Pimenova 2002a: 350, 363-364) が触れているような地域的な分布の差異があった可能性は排除できない。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどう拡張したか 黒田 享
4つのコーパスで同一箇所が揃わないことも多い。

- (20) Quibus, ut indigent, solacia administrentur, ut absque murmuratione serviant, et iterum, quando occupationem minorem habent, exeant ubi eis imperatur in opera. (M358 第 53 章 18 条)

Den als si bidurfen di troste werden zuo gitan dc ane murmulun si dienen vnd aber so si unmuozze minre hant si uz gangen da in wirt gibotin in werke

.Wenn nötig, sollen ihnen Gehilfen beigegeben werden, damit sie ihren Dienst ohne Murren tun; sobald sie weniger zu tun haben, sollen sie zur Arbeit hinausgehen, wohin man ihnen befiehlt.'

- (21) nisi forte prior pro aedificatione voluerit aliquid breviter dicere. (M324 第 38 章 9 条)

iz in si dz die prelsen it sprechen wolle curtzliche die ander zu bezerne.
.es sei denn der Obere möchte zur Erbauung kurz etwas sagen.'

- (22) Hiemis tempore, id est a kalendas Novembres usque in Pascha, iuxta considerationem rationis, octava hora noctis surgendum est (M358 第 8 章 1 条)

des winters zihte dc ist. von kalendas des manodis vnze in de ostra. nah der ahtunge der biscaidenhait der ahtodvn stunde der naht uf zi stande ist

.Zur Winterzeit, das heißt vom ersten November bis Ostern, soll man, aus Rücksicht der Vernunft, zur achten Stunde der Nacht aufstehen ...'

表 6 は中高ドイツ語コーパスで確認できる -tio 名詞の翻訳に使われる表現の分布を示す。ここで焦点が当たるのは -(e)de 名詞と -unge 名詞だが、それ以外の表現の頻度も表に含める。

表6 翻訳対応関係(中高ドイツ語はトークン頻度のみ)²¹

		M358			M324		
		タイプ数	トークン数	トークン比率	タイプ数	トークン数	トークン比率
名詞	-nisse (動詞基体)	1	1	0.6%	2	2	1.7%
	-nisse (形容詞基体)				1	1	0.9%
	-nissede (動詞基体)	1	2	1.2%			
	-t (動詞基体)	2	2	1.2%	1	1	0.9%
	-t (語彙化したもの)	1	3	1.7%			
	-t (男性名詞形成)	1	1	0.6%			
	-(e)de (動詞基体)	2	3	1.7%	2	2	1.7%
	-(e)de (語彙化したもの)	2	3	1.7%			
	-unge (動詞基体)	28	47	27.3%	21	32	27.8%
	-unge (名詞基体)				2	2	1.7%
	-unge (語彙化したもの)	7	8	4.7%	2	2	1.7%
	名詞化不定詞	4	11	6.4%	7	8	7.0%
	語幹形成 (動詞基体)	13	31	18.0%	7	20	17.4%
	語幹形成 (語彙化)	1	1	0.6%			
	非派生名詞	11	49	28.5%	14	21	18.3%
	形容詞基体 (語幹形成)	3	6	3.5%			
	形容詞基体 (接尾辞)				4	4	3.5%
	名詞基体 (接尾辞)	1	1	0.6%	1	1	0.9%
動詞	動詞定形	2	2	1.2%	11	14	12.2%
	不定詞				4	4	3.5%
形容詞	動詞分詞	1	1	0.6%	1	1	0.9%

表3と比較すると、古高ドイツ語では -tio 名詞の主要な翻訳形式として -ida 名詞が -ung 名詞より頻繁に -tio 名詞の翻訳に使われていたものの、中高ドイツ語にかけて -unge 名詞だけが主要な手段になっていった流れが見てとれる。古高ド

²¹ -nisse, -t, -(e)de, -unge を伴う名詞でも行為名詞でないものは「その他の表現」に含まれる。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどうか 黒田 享
 イツ語コーパスではタイプ頻度で -ung に匹敵し、トークン頻度では上回っても
 いた -ida は中高ドイツ語コーパスになると頻度が大幅に低下している。

次に、抽出した -ida/-(e)de, -ung/-unge を伴う行為名詞に限定して、基体動詞
 の形態的性質との関係を観察した結果を表 7 として示そう。

表 7 -ida/-(e)de, -ung/-unge による -tio 名詞の翻訳 (タイプ数/トークン数)

	-ida/-(e)de 行為名詞		-ung/-unge 行為名詞	
	基体動詞が接頭辞を伴わないもの	基体動詞が接頭辞を伴うもの	基体動詞が接頭辞を伴わないもの	基体動詞が接頭辞を伴うもの
AHD	1 / 2	9 / 22	11 / 17	1 / 1
M358	0 / 0	2 / 3	16 / 29	12 / 18
M324	0 / 0	2 / 2	10 / 17	11 / 15

-(e)de を伴う行為名詞はもともと数がわずかであるため参考になりにくい
 が、-unge を伴う名詞については基体動詞に接頭辞が伴う場合が増えていることがわ
 かる。もちろん古高ドイツ語同様に接頭辞を伴わない動詞を基体とする -unge 行
 為名詞も観察できるが、接頭辞動詞を基体とするケースが浸透してきていると言
 える。

7. 結論と展望

Wellmann (1975) が示すように、現代ドイツ語の行為名詞は様々な接尾辞に
 よって形成されるが、形成要素として活発なのは -ung に限られる。だが、古高
 ドイツ語では -ung だけでなく、現代ドイツ語の -de に相当する -ida も行為名詞
 形成要素として一定の役割を果たしていた。-t 名詞は早い段階で語彙化していた
 と思われるし、-nissi/-nisse を伴う行為名詞も発達していないことから、全体と
 しては -ida の衰退により行為名詞形成要素が -ung に収斂する大きな流れが認め
 られる。もっとも、行為名詞形成においては語幹形成の役割が大きく、-ung だ
 けが行為名詞形成の主要な手段であるとは認めにくい。

機能の上で競合関係にある語形成要素が通時的に一本化されていくように見え
 る現象はしばしば観察される。機能的に類似していても、形式が異なる要素はあ

くまで競合関係にあるという考え方も見られる (Aronoff 2019) が、ドイツ語において動詞 sein が3種の動詞の混交であることや、弱変化動詞がゲルマン語におけるアクセントの語頭化により3類の弱変化動詞 (-jan 動詞・-ôn 動詞・-ên 動詞) が混交したものであることなどを考えると、もともと異なる要素が一つの要素にまとまっていく現象の存在は否定されるべきではないだろう。本稿で取り上げている行為名詞形成手段となる接尾辞については、複数の要素の競合があったものの -ung のみが生産性を保ち、それ以外の形式は語彙化したと考えられるので、混交とは違った位置付けをしなければならない。Munske (2002: 33) によれば、語形成要素が音的に消失した場合、それが担っていた語形成パターンが異解釈 (Umdeutung) や新規動機づけ (Neumotivation) を受けることがしばしばある。行為名詞を形成する接尾辞が -ung に収斂していく展開の背後にも接尾辞の音的性質 (そしてその変化) があるのだろう。-t はもともと音的卓越性が低い要素であるし、古高ドイツ語で一定の音価を担っていた -ida や -nissi も時代が下がるにつれて音的に弱化の道を辿った²²。これが -ung のみが行為名詞形成手段として生き残った理由なのかもしれない²³。

Lindqvist (1936: 120) は動詞 fâhan ‚fangen‘ から語幹形成によって形成された vang について、これが行為名詞の性質を失って具体的な (目的語的) 意味機能を帯びようになったため、行為名詞として fahunga を使うようになったと述べる。しかし行為名詞の形成において語幹形成の役割が中高ドイツ語になっても衰えていないことはすでに見たとおりである。行為名詞の語幹形成を通じた派生と接尾辞を用いた派生の比較は、語幹形成の語形成上の位置付けをより明確にした上で改めて取り組む必要がある。その際は各種の語幹形成パターンの相互関係も視野に入れることも必要だろう (Pimenova 2021)。また、これに関連して名詞化された動詞不定詞と行為名詞の競合関係も興味を引く。今回調査したコー

²² Wilmanns (1899: 342) は -ida による名詞形成が古高ドイツ語期に減少し、音価がより高い -heit や -ung を伴う名詞に置き換わっていったとしている (Henzen 1957: 174)。

²³ 従来の研究でも、接尾辞による行為名詞形成と語幹形成の競合に関連して音的性質が議論されることがあった (Lindqvist 1936, Demske 2000, Hartmann 2016 など)。

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどう拡張したか 黒田 享
パスでも、行為名詞のように振る舞う名詞化不定詞が複数確認できた（例文（13）
および（21）参照）。さらに、行為名詞形成要素の分布が文体的条件から受ける
影響についても検討が必要だろう。Grimm（1826: 360, 362）やLindqvist（1936:
47-48）によれば、-ung を伴う行為名詞は古高ドイツ語や中高ドイツ語の文芸テ
キストでは稀にしか現れないようだ。

いずれにせよ、今回コーパスとして使ったベネディクトゥス戒律は規模が小さ
くとも、古高ドイツ語から中高ドイツ語を経て現代ドイツ語に至るまでの通時的
対照調査が可能なテキストであり、ドイツ語の歴史的变化について考えるための
重要な情報源であることが本稿の議論を通じて明らかになったのではないだろ
うか。規模が大きいテキストと組み合わせることで、ドイツ語史のこれまで光が
当てられなかった点に迫るために有効な出発点になるだろう。

参考文献

- Aronoff, Mark (2019) : „Competitors and Alternants in Linguistic Morphology.“
Rainer, Franz/Gardani, Francesco/Dressler, Wolfgang U./Luschützky, Hans
Christian (ed.) (2019) : *Competition in Inflection and Word-Formation*.
Cham: Springer. 39-66.
- Baayen, Harald (1992) : „Quantitative Aspects of Morphological Productivity.“
Yearbook of morphology 1991: 109-149.
- Bahder, Karl von (1880) : *Die verbalabstrakta in den germanischen sprachen,
ihrer bildung nach dargestellt*. Halle: Max Niemeyer.
- Bammesberger, Alfred (1990) : *Die Morphologie des urgermanischen Nomens*.
Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag.
- Demske, Ulrike (2000) : „Zur Geschichte der *ung*-Nominalisierung im
Deutschen: Ein Wandel morphologischer Produktivität.“ *Beiträge zur
Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 122: 365-411.
- Dittmer, Ernst (1987) : „Die althochdeutschen Verbalabstrakta auf *-ida*, *-nissa*
und *-unga*.“ Bergmann, Rolf/Tiefenbach, Heinrich/Voetz, Lothar (Hg.) :

- Althochdeutsch. Band I: Grammatik, Glossen und Texte.* Heidelberg: Carl Winter. 290-304.
- Dudengrammatik (2022) : *Duden: Die Grammatik.* 10., völlig neu verfasste Auflage. Wöllstein, Angelika (Hg.) . Berlin: Dudenverlag.
- Fleischer, Ida (1901) : *Die Wortbildung bei Notker und in den verwandten Werken, eine Untersuchung der Sprache Notkers mit besonderer Rücksicht auf die Neubildungen.* Dissertation Göttingen.
- Fleischer, Wolfgang/Barz, Irmhild (2012) : *Wortbildung der deutschen Gegenwartssprache.* 4. Auflage. Berlin/Boston: Walter de Gruyter.
- Fruyt, Michéle (2011) : „Word-Formation in Classical Latin.“ Clackson, James (ed.) : *A Companion to the Latin Language.* Chichester: Blackwell Publishing. 157-175.
- Grimm, Jacob (1826) : *Deutsche Grammatik. Zweiter Teil.* Göttingen: Dieterich.
- Gutmacher, Erich (1914) : „Der Wortschatz des althochdeutschen Tatian: In seinem Verhältnis zum Altsächsischen, Angelsächsischen und Altfriesischen.“ *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 39: 1-83; 229-289; 571-577.
- Hartmann, Stefan (2013) : „Zwischen Transparenz und Lexikalisierung: Das Wortbildungsmuster *X-ung(e)* im Mittelhochdeutschen.“ *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 135: 159-183.
- Hartmann, Stefan (2016) : *Wortbildungswandel: Eine diachrone Studie zu deutschen Nominalisierungsmustern.* Berlin/Boston: Walter de Gruyter.
- Henzen, Walter (1957) : *Deutsche Wortbildung.* 2., verbesserte Auflage. Tübingen: Max Niemeyer.
- Hirt, Hermann (1932) : *Handbuch des Urgermanischen. Teil I: Stammbildungs- und Flexionslehre.* Heidelberg: Carl Wnitters Unvierstätsbuchhandlung.
- Klein, Thomas/Solms, Hans-Joachim/Wegera, Klaus-Peter (2009) : *Mittelhochdeutsche Grammatik. Teil III Wortbildung.* Tübingen: Max

- ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどう拡張したか 黒田 享
Niemeyer.
- Kluge, Friedrich (1926) : *Nominale stambildungslehre der altgermanischen dialekte*. 3. Auflage. Halle: Max Niemeyer.
- Lindqvist, Axel (1936) : „Studien über Wortbildung und Wortwahl im Althochdeutschen mit besonderer Rücksicht auf die nomina actionis.“ *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 60: 1-132.
- Masser, Achim (2002) : *Kommentar zur lateinisch-althochdeutschen Benediktinerregel des Cod. 916 der Stiftsbibliothek St. Gallen*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Meid, Wolfgang (1969) : *Germanische Sprachwissenschaft: III Wortbildungslehre*. 7. Auflage. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Meineke, Eckhard (1994) : *Abstraktbildungen im Althochdeutschen: Wege zu ihrer Erschließung*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Motsch, Wolfgang (2004) : *Deutsche Wortbildung in Grundzügen*. 2., überarbeitete Auflage. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Munske, Horst Haider (2002) : „Wortbildungswandel.“ Habermann, Mechthild/Müller, Peter O./Munske, Horst Haider (Hg.) : *Historische Wortbildung des Deutschen*. Tübingen: Max Niemeyer. 23-40.
- Paul, Hermann (1920) : *Deutsche Grammatik. Band V. Teil V: Wortbildungslehre*. Nachdruck 1968. Tübingen: Max Niemeyer.
- Pimenova, Natalja B. (1996) : „Aktive und inaktive Verbalabstrakta im Althochdeutschen.“ *Das Wort: Germanistisches Jahrbuch der GUS*. 106-111.
- Pimenova, Natal'ja B. (2002) : „Semantische Restriktionen für die unga-Ableitung im Althochdeutschen.“ *Das Wort: Germanistisches Jahrbuch der GUS*. 93-106.
- Pimenova, Natalia B. (2002a) : „Prädikatsklassen, semantische Rollen und die derivationale Markierung von Verbalnomina im Althochdeutschen.“ *Leuvense Bijdragen* 91: 349-368.

- Pimenova, Natalia (2021) : „Semantische Systemrelationen als Faktoren im diachronen Wandel von Wortbildungssystemen.“ Ganslmayer, Christine/Schwarz, Christian (Hg.) : *Historische Wortbildung: Theorien – Methoden – Perspektiven*. Hildesheim: Olms. 225-249.
- Schneider-Wiejowski, Karina (2011) : *Produktivität in der deutschen Derivationsmorphologie*. Dissertation. Universität Bielefeld.
- Splett, Jochen (1993) : *Althochdeutsches Wörterbuch: Analyse der Wortfamilienstrukturen des Althochdeutschen, zugleich Grundlegung einer zukünftigen Strukturgeschichte des deutschen Wortschatzes*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Stotz, Peter (2000) : *Bedeutungswandel und Wortbildung*. München: C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung.
- Wellmann, Hans (1975) : *Deutsche Wortbildung - Typen Und Tendenzen in der Gegenwartssprache: Eine Bestandsaufnahme des Instituts für deutsche Sprache Forschungsstelle Innsbruck. Zweiter Hauptteil: Das Substantiv*. Düsseldorf: Pädagogischer Verlag Schwann.
- Wilmanns, Wilhelm (1899) : *Deutsche Grammatik: Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch. Zweite Abteilung: Wortbildung*. 2. Auflage. Straßburg: Karl J. Trübner.

利用テキスト

- Die Benediktsregel: Lateinisch/Deutsch*. Übersetzt von Gernot Krapinger. Herausgegeben von P. Ulrich Faust. 2018. Ditzingen: Reclam Verlag.
- Die Althochdeutsche Benediktinerregel des Cod. Sang 916*. Herausgegeben von Ursula Daab. 1959. Tübingen: Max Niemeyer.
- Die lateinisch-althochdeutsche Benediktinerregel Stiftsbibliothek St. Gallen Cod. 916*. Herausgegeben von Achim Masser. 1997. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

ドイツ語の動名詞派生接辞の歴史の変遷：-ung の機能領域はどう拡張したか 黒田 享

Middle High German Translations of the Regula Sancti Benedicti: The Eight Oldest Versions. Edited by Carl Selmer. 1933. Cambridge: The Mediaeval Academy of America.

利用コーパス

Referenzkorpus Altddeutsch. <http://www.deutschdiachrondigital.de>

Referenzkorpus Mittelhochdeutsch (1050–1350). <https://www.linguistics.ruhr-uni-bochum.de/rem/>

*本研究は2023年度武蔵大学総合研究機構から受けた助成（プロジェクト「修道生活の様態と言語使用」）、科学研究費補助金（18K00550 および 23K00532）、2022年度国立国語研究所共同利用型研究「動詞形成の歴史的变化に関する文献資料研究」による研究成果の一部である。なお、内容は2023年10月10日にベルリン・フンボルト大学 Sprachhistorisches Kolloquium で行った講演および2023年10月14日に日本独文学会秋季研究発表会で行った口頭発表に基づいている。

